

日本の学術研究はどこへ行くのか

明治大学専任教授連合会幹事長 遠藤 公嗣

会員にもご記憶の方が多いと思うが、2019年4月の朝日新聞朝刊に、江戸時代の仏教思想史を専門とした一人の女性研究者の自死の記事が掲載された。西村玲さんである。優秀な研究者で、早い段階から優れた多数の研究業績を公刊し、それらをまとめた最初の研究書の公刊によって、2009年度の日本学士院学術奨励賞を受賞していた。この賞は全研究分野をつうじて毎年度5-6人にしか授与されない学術賞であって、その受賞は彼女の研究業績がいかに高く評価されていたかを示していると思う。しかし彼女は、2016年2月に自死した。享年43歳だった。

彼女の自死には、彼女の個人的な事情が影響していることは否定できない。しかし、その背景に、大学などの安定した常勤研究職を望んで、20以上の大学に応募したにもかかわらず採用されなかったこと、これが大きく影響していることも否定できない。彼女の専門は仏教思想史であって、いわゆる実学とは遠く、常勤研究職ポストが非常に少ない研究分野であった。だから、そもそも常勤研究職につくことは容易でないはずで、自死の主な理由は彼女の個人的な事情にある、との意見もあると聞く。

しかし、それにしても、と私は思ってしまう。日本という国は、彼女のような優秀な研究者のたった一人すら養えない国に、もうなってしまったのか。この思いである。実に暗澹たる気持ちになってしまう。

もし、彼女が早い段階で常勤研究職についていたならば、江戸時代の仏教思想史についての優れた研究業績を続々と公刊したであろうことは確実であり、おそらくは、たとえば「江戸時代の」あるいは「仏教の」という限定を取り払った研究に視野を拡大することは、十分に予測できたことであつた。そして、そうした研究業績は、現代日本の宗教思想を理解する上で、基礎となる貴重な知見を提供することになったであろう。

世間でいう「実学から遠い」も、誤解があるように思う。基礎研究があつて、はじめて「実学」は発展する。あえて彼女の研究を例とすると、現代日本の宗教思想を理解しておくことは、いくつかの商品の「マーケティング戦略」に有益なはずである。

彼女の研究だけでなく自然科学分野でも、この20年で、基礎研究が重視されない傾向が強まっている。短期で「実学」研究成果が出る研究テーマが、常勤研究職ポストも研究助成費も得やすい。そうすると、研究テーマがそちらに流れやすいのが人情である。だが、その分だけ、時間がかかる基礎研究は成果が出ないし、衰退する。基礎研究の衰退の負の影響の一つとして、実のところは、「実学」研究が停滞することが考えられよう。私見では、人文社会科学分野はもちろん自然科学分野でも、「実学」研究の停滞は、現在もう現れている。

日本の学術研究はどこへ行くのか。